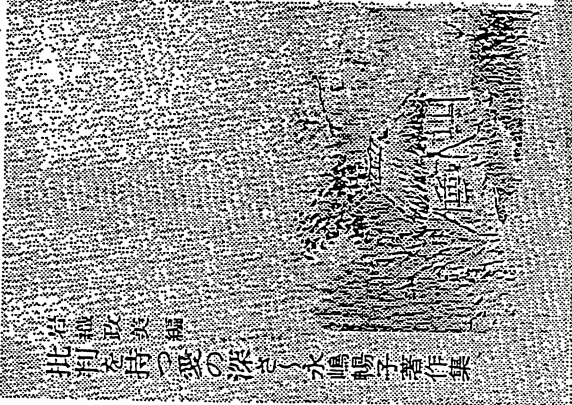


半世紀ぶりに掘り起こされた著作集の表紙(左) 永嶋楊子(三日前から)



① 彼女は満州で死んだ



没後半世紀の著作集

この八月三日、豊森八戸市である女性運動家の「著作集」出版記念祝賀会が行われた。

女性運動家は、同県三戸郡名川町出身の永嶋楊子(よしまつ)と書くことも、その存在は最近まで、郷土でも近親者のごく一部で知られていたにすぎない。

戦後の混乱がまだ続いた昭和二十一年(一九四六)二月四日、当時の満州(中国東北部)で四十九歳の誕生日を目前に死去。半世紀を経て初めて成った著作集には「批判を待つ愛の深さ」のタイトルが付いている。彼女がかつて「女阿蘭」と題して書いた映画「大地」の感想文の二節からとられた。

永嶋は昭和の初め、長谷川時雨の女

人芸術」に数多くの鋭い社会評論を寄稿し、柳近市子、林業義子、上田(白)地、文子、平林たい子、岡本かの子らと同時代に活躍した。昭和十三年(一九三八)十月、社会運動や「女人芸術」を通して知り合った友人の八木秋子を頼って満州にわたり、終戦を迎える。

八木とは、思想を異にしたがら終生、深い友情と信頼の関係を結ばれていた。

「永嶋はマルキスト、八木秋子はナチキリストですがね、共通しているのは、人間をきつと見とってきた、見ているところ。それを一番大事にしていることですね」

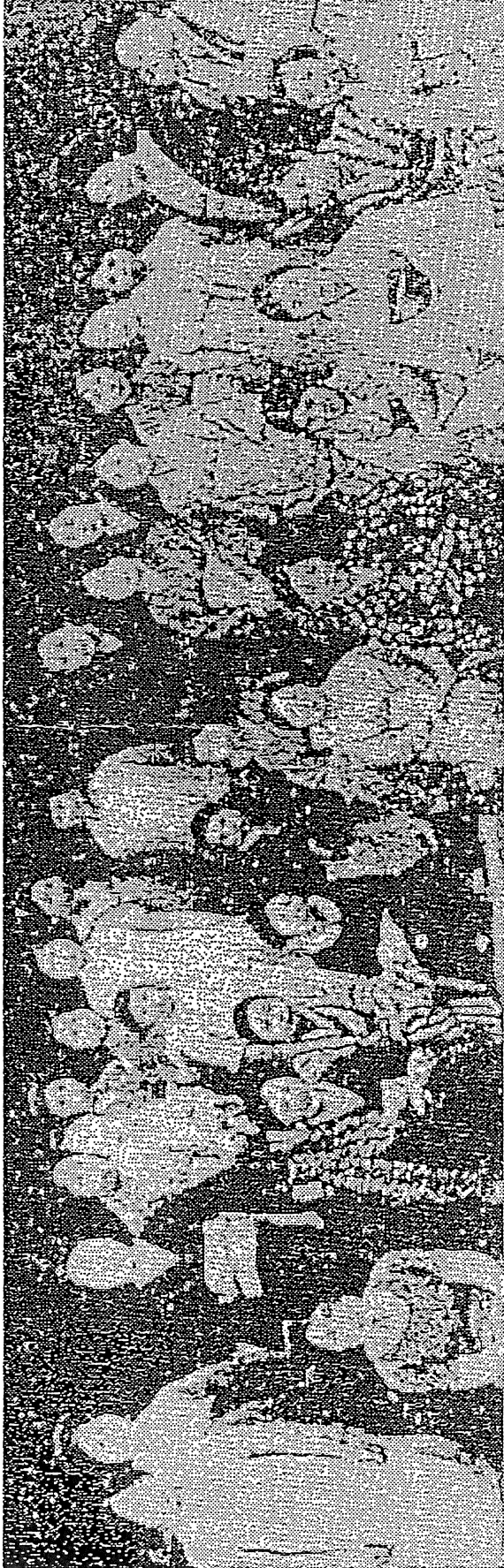
今回の著作集を編んだ岩織政美さん(八戸市太久保字小久保)は、こ

の十年、郷土の先輩である永嶋の存在を人々に伝え、女性史のページに位置づけることを自らの仕事として譲ってきた。七年前には、彼女の足跡を丹念に掘り起こした労作「永嶋楊子の生涯」を著している。

「前著と今回の著作集は二対のもの」という岩織さんの一連の仕事によって、埋もれかけていた二人の人間の全体像が浮かび上がってきた。

永嶋の最期の様子については、岩織さんの著書でも語る人によって、見解は必ずしも一致しないが、その後、新しい事実もわかってきたという。満州にわたった婦人運動家の死を通して、戦争の側面を覗いてみたい。

(編集委員 中村 勝)



彼女が満州で死んだ

約束はたせず心残り

岩織さんが、永嶋暢子の名前を知ったのは今から十三年前。日本国民救済会青森県本部作成の「解放のいしずえ」に載った解放運動犠牲者の名簿だった。

「青森県八戸市出身。上京して一九二七年(四二ごろ)から雑誌『女芸術』等に時評を執筆。二八年三・二五弾圧が起ると解放運動犠牲者救済会の活動に参加した。その後、金物日本繊維のオルグとなり、東京地方で活動中検挙された。後、運動を退き、結婚生活に破れ、中国に渡ったが、四五年敗戦直後、東北(満州)において自ら命を絶した。享年四八歳位」

ここでは「運疾不明」とされており、それ以上の手掛かりはなかった。

「この時点では、名前の呼び方も、ノ子とかヨリ子とか、またそれ以外なのか見当もつかなかった」という岩織さん。数日後、新聞で「女芸術のひと」の聞き書きを続けていた近代文学研究家、尾形明子さんのことを知る。

尾形さんは現在、東京女学

館短期大学教授。「女芸術の世界」長谷川時雨とその周辺、「女芸術のひと」に続いて、昨年刊行した「輝く」の時代」長谷川時雨とその周辺(いずれもドメス出版)などの著書がある。尾形さんの著書の中で、八木秋子は永嶋について、語っている。

「(永嶋)昭和十三

年に満州に渡りました。日本ではもう身動きできませんでしたから渡って六月月日に長(永)嶋暢子さんが訪ねてきて、それ以後本当に親になりました。…そうこうするうちに二十年になり、長嶋さんはアムール川を越えてシベリアに行こうと誓う。今はそんな甘い時代じゃないからと言って、中国に残り、中国がどう変わるかこの目で確かめ一緒に施されてみよと固く約束したのですが敗戦。(長嶋さんは)華夫に出張中で連絡の取れないまま不審な最後でした。心残りではまらないことです。華夫は、現在の構構。八木は、終戦の年の十一月に満州から引き揚げ、一九八三年四月、八十七歳で死ぬまで、永嶋への言い尽くせぬ思いを何回か書き起こしていた。

「女芸術」創立十周年記念著書(一九八〇年)

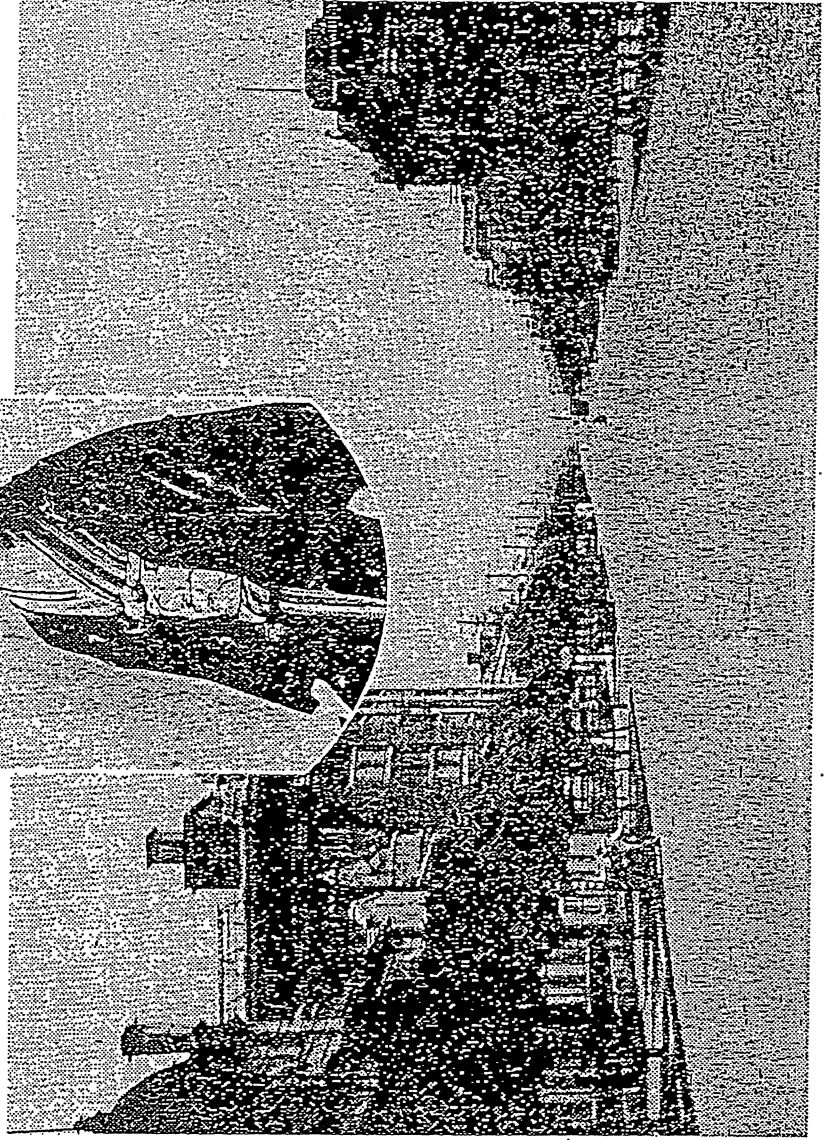
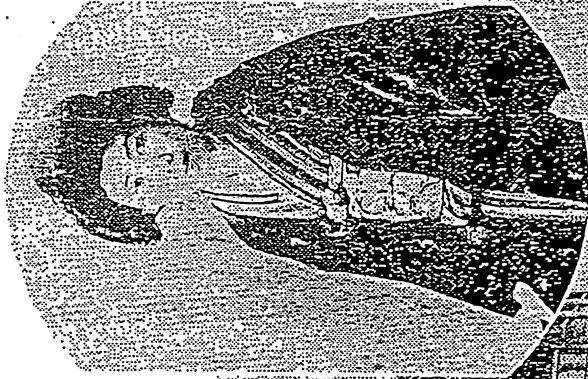
後方左より6人目永嶋暢子。前列左が八木秋子。長谷川時雨、林葉美子、神近市子らの顔もみえる(岩織政義編「永嶋暢子著書集」から)



彼女が満州で死んだ

「女芸術」の人々の聞き書きを統
けてきた尾形明子さんは「八木秋子
の戦後は永嶋暢子の死を背負うこと
から始まる。彼女にとってそれは死
ぬまで消すことのできない悔いだっ
た」と言う。暢子について八木は肩
をふるわせ、尾形さんに語り続けたと
いう。

「高群逸枝・森の家の巫女」(第三)



昭和初期、大連の主要街区の風景(写真作家・小林文司氏が昭和10年、20歳の
とき満州旅行した折に購入したという写真集から)。上は永嶋暢子さん(東京
・九段にて、「永嶋暢子著作集」から)

亡き友背負う半生

文壇の著作がある西川祐子さん(中
部大学教授)は、高群が昭和五年(二
九三〇)に創刊した「婦人戦線」の研
究を通じて八木への関心を深め、彼女
をモデルにした短編大連から来た女
も書いた。ある時、八木は「満州に親
友を置いてきて、戦後の世の表面に出
よことは思わなかった」と、西川さん
に語っている。

八木が戦後、異い沈黙の後に語りは
じめたのは一九七七年の真、個人通信
「あるはなく」を出してからである。
八木の生きる姿勢に共感して対話を統
括していた若し友人、相原麗昭さん(元
井原京都市小平市花小金井)が、「八木

さんの心を養ひきる場所として」つく
った第一号の送り先は、三十数名だっ
た。通信は十五号を運んだ後、休刊号
で八木の死後に出した「馬頭麗麗書」
で閉じるが、この間、通信の読者の広
がりとともに、「八木秋子著作集」全
三巻が刊行された。

著作集の原稿の多くは、編集人が函
書館の古い雑誌や新聞、パンフレット
などから丹念に採集し、あるいは古い
ノートから原稿用紙へと文庫を起し
再生させた。

この真ん中にいた相原さんと永嶋
暢子の著作集をまとめた若織さんは、
お互いの仕事を相照らし形を結びつき

を深めていく。八木と永嶋の友誼のき
ずなに見られるように、男たちのそれ
ぞれの思いが重なる。

永嶋の著作集刊行差祝つ会に出席し
た相原さんは、若織さんにこんな言葉
を贈った。

「一九八二年五月、八木秋子著作集
の三巻を八木さんが入っていた東京の
老木ホームに届けたとき、八木さんは
その本を手にして、こう言いました。
『よこそ三まで、おおこれが私の著
作集なんだね』と感極まったように。

私は、だぶん永嶋さんもそのセリフを
言っているに違いないと信じておりま
す。

94.9.1



永嶋孝子著作集のタイトル「批判を
持つ愛の深さ」について、岩織さんは
「八木秋子研究の相模館氏との共感
を」とくに後記で記している。

相模氏は、八木と永嶋の「それぞ
れ二人が修羅場を経て獲得した非違す
る精神」すなわちその「絆きずな」は、
批判の精神だと思ふこと言ひ、岩織さ
んの著作「永嶋孝子の生涯」に、次の
ような文章を寄せてい
る。

「八木が愛情とい
うとき、永嶋の『批判を
持つ愛の深さ』と対応
する。批判とは他者の
視点をとり込むことで
ある。ありていにいえ
ば、異質な世界との境
界までわれわれ自身が
往(い)くことだとも
いえようか。異質なも
のを日常から排除する

④
彼女が満州で死んだ

思想を超えた深い交流

ときわれわれは、なん
ら有効なカードを持たぬ
まま単機能高度化社会へ
突入し、一方向(やむ)
は深く侵襲していくので
ある。

相模氏は、八木の死
後も彼女につながる人た
ちの投稿誌「パン」の
発行を続けており、岩織
さんも同誌で「永嶋孝子の人となり」を
知るうえで、決定的なのは、八木秋子
氏との深い交流、絆である」と書く。
「マルキストとアンチマルキストとい
う思想的立場を異にしなから、互いにお
だかまりを介せず、純粋なものを

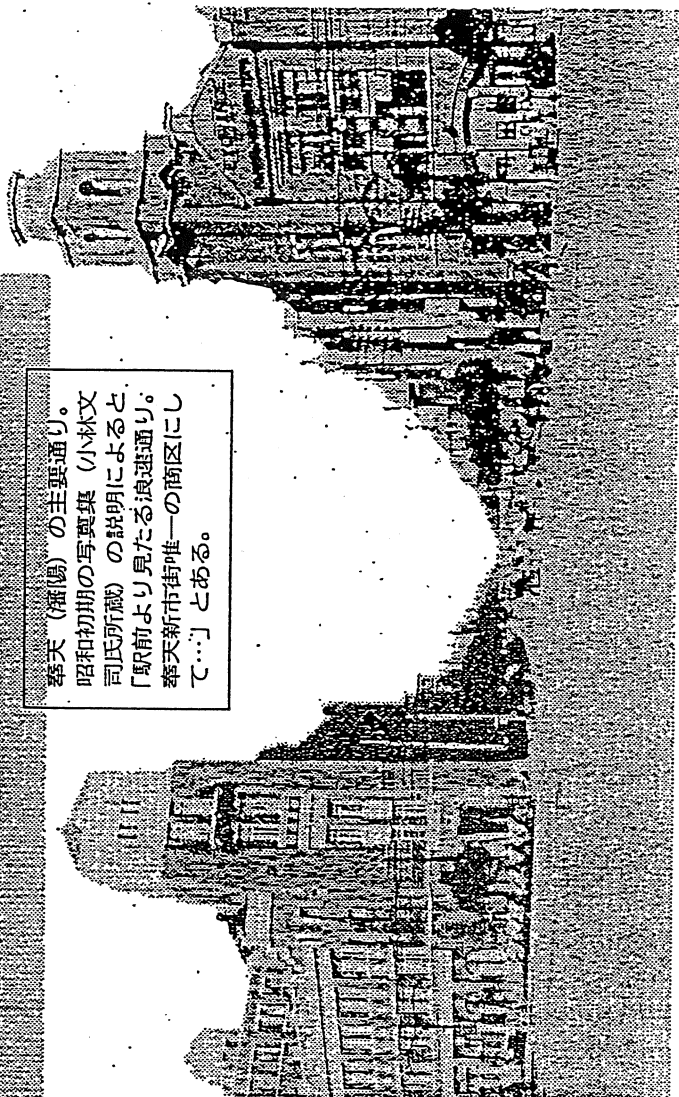


永嶋と終生の良き友人
だった、八木秋子さん

見つけ合い、信じ合えた二人の女性連
繋の交流は、非産党の市会議員で
もある岩織さんと、金其闘時代で、ア
ンチマルキストを巡りて八木に引かれてい
った相模さんとの共感となつて今
語り継がれはじめた。

岩織さんは、相模さん
たちの交流のなかで「わた
しは主義のために生きると
は思っていないですよ。人間
のためというのが前提です
から」と語っているが、二
人の関係もまた、お互いの
思想を尊重し、人間を見る
目とつながっているとい
うことだろう。

二人の女の軌跡を辿ること結びつ
いた男たちの交流は、ここではひとま
ずおいて、女たちの生きた時代に戻ら
なければならぬ。
戦争の時代に、転向者として満州に
渡った女たちの跡を辿つて。



奉天(瀋陽)の主要通り。
昭和初期の写真集(小林文
司氏所蔵)の説明によると、
「駅前より見たる浪速通り。
奉天新市街唯一の商区にし
て…」とある。

かされたしだりの記事には懐かしい、心と書いてるように、「原」には思いを感じたが、それ以上に喜まひねる場面が多かった。

特に奇妙なのは、女性にかかわる慣習についての項目である。お宮参りのとき母親が同行しないのは出産の疲れ

心と書いてるように、「原」には論理ではわかり知れない独特のしきたりがあるとい、それを「伝統文化」として特権化することをもつばら重畳視されているように思えるのだ。

人様のごに口を差し挟むのは気が



ハムト

がずしと通らないのではないかと後者を避るとすれば、よほど「原」幻想を作り上げねば失敗だろう。それだけの力が今の京都には、の絶たが。

(梅花女子大学助教授・園)



新京(長春)郊外の農村(昭和19年、写真作家・小林文吉氏撮影)

おんなの生涯 50

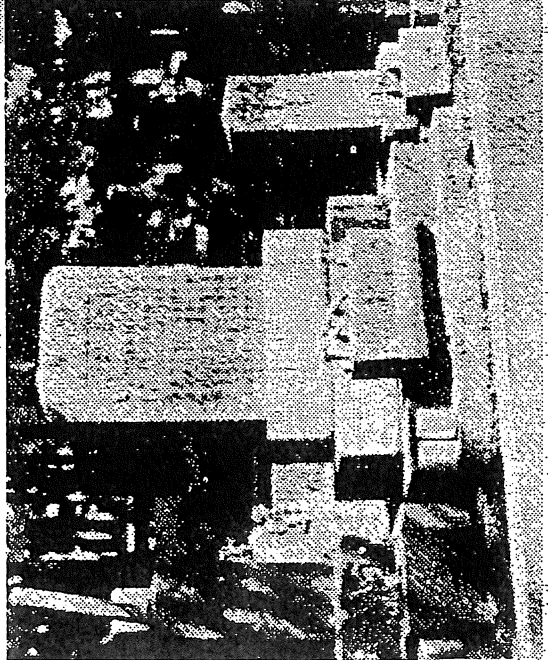
永嶋の葬儀を営んで十年程たつてから、故郷の永嶋家の人々が役場に提出しようとして準備した「死と現証書」が未完成のまま、岩織さんの手元に残っている。現証書となるべき「青森出身の満州で友誼だったという人」の確認ができず、従つて永嶋は戸籍簿上は「生存」して、まもなく戦後五十年を迎える。

「永嶋の遺骨については共產党本部に届けられ、青山の無名戦士の墓に納められている」という証言もあるのですが、届けられた人物がわからず、書類は提出できなくて、私が預かったままです。」

岩織さんが永嶋暢子の名前に出会った一九八一年から、十四年の歳月が過ぎようとしている。この間、八七年に刊行した「永嶋暢子の生涯」に続いて、この夏には、念願の著作集を出した。「仕事終わったかなあ」という感慨に溢りながら、岩織さんは「私の生涯は一面では永嶋暢子とのかわりを持ちつつあることになりつつあること」を知っている。

永嶋三木の眠る八戸大塔
中「永島七十四代々の墓」
(岩織政英著「永嶋暢子の生涯」から)

彼女は満州で死んだ



半世紀、出会う友情

岩織さんが、永嶋の名前を知る六年前、八木が一人住む東京の四畳半のアパートを、相模原昭さんが訪ねている。「生活費は生活原資が中心であり、主に読書に明け暮れる日々であったようだ」という。まもなく八十一歳の冬に老人ホームへ入るのを機に、相模さんは八木の表現の場としての通信「あるはなく」の発行を申し出、これが出発点となって「八木秋子著作集」全三巻の刊行につながっていく。

八木は著作集上のおとぎで、「私の心の友、相模原昭君が、菅日頃足を運んでくれて語り合った私との対話を、何かの形で文章として残さないかという。私はこの対話という申し出がどんなにつれしかつたか」と書いてる。八木がそれまでの孤獨な生活の中で「唯一犯されることなど守ってきたもの」を継続させたい、相模さんの願いだつた。

永嶋と八木にひかれていた男たちが、女たちの交流の深さに思いを重ねるように、互いの思想を越えて共有した未完の物語の続きは、こうして、今を生きる私たちの手に渡されたのだ。

(この項おわり)

このシリーズは、しばらく休載して、十二月下旬から再開の予定だ。

13日、バグダッド入りしたコズイレフ・ロシア外相(左)と会談するフセイン・イラク大統領。(AP共同)



「普通の芸人」「韓国舞踊」もの、人間関係がらですが、通の芸人として、在日韓国人。

肉體老いて、無常を知らず、それを手べきたと語る、聖教行善クツン、巴土写真、宗教学者、山師匠で、共著者、来日、東京都ラマ法王日本チベット仏教

